

椎間板ヘルニアとは

椎間板は背骨や首の骨の1つ1つの間に存在し、衝撃を吸収するクッションのような役割があります。

椎間板はゼリー状の「髄核」とそれを覆う「繊維輪」から成ります。

椎間板ヘルニアとは、椎間板が正常の位置からずれて、脊髄を圧迫することで麻痺などの神経症状を現す疾患です。椎間板の一部が椎間板から離れて、脊髄を圧迫しているということもあります。

・ハンセンI型

→髄核がそれをおおう繊維輪の亀裂から出て、脊髄を圧迫している状態。急に発症する傾向があります。

髄核の状態が変化しやすい体質の犬種(ビーグル、ダックス、キャバリア、フレンチブルドッグ、ペキニーズなど)では若齢でも発生することがあります。

・ハンセンII型

→繊維輪が変形し、繊維輪が脊髄を圧迫しています。急激な症状と言うより、慢性的に進みます。

椎間板ヘルニアとして治療していた子が進行性脊髄軟化症を発症する場合もあり、慎重な観察が必要です。

※進行性脊髄軟化症

…椎間板ヘルニアなどによる脊髄の障害部分から、頭側、尾側に向かい、脊髄の壊死が進行していきます。

発症したほぼ全ての子は、麻痺により呼吸ができなくなり、死に至ります。

《症状》

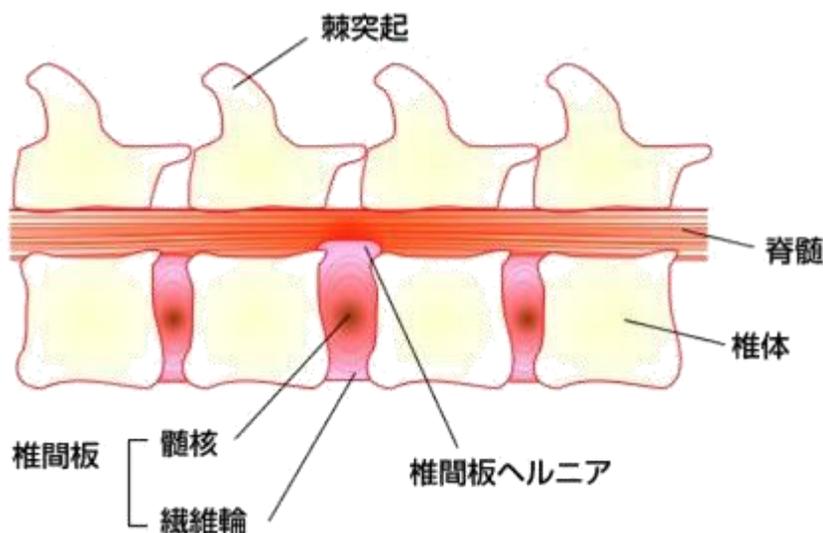
- ・後肢に力が入らない、又は麻痺
- ・抱っこしたときに鳴く
- ・段差を嫌がる 等

神経の圧迫が重度だと自力で排泄が出来なくなります。

また、重度だと痛覚が無くなり、足を強くつまんでも無反応になります。

《診断》

触診や神経学的検査などであたりを付けることができますが、どの部分の椎間板に異常があるかを調べるには全身麻酔下でのCT/MRIが必要です。



《治療》

◆ 外科手術

麻痺の程度や病態によっては手術が検討されます。

脊椎の一部を削り取り、飛び出て脊髄を圧迫している椎間板物質を除去する手術です。

術後は長期にわたってリハビリが必要となります。また、手術をして回復するかや回復の程度はその子の病態によって異なり、必ずしも歩行が可能になるわけではありません。

◆ 内科治療

病態が軽度であれば鎮痛剤、消炎剤、神経保護のビタミン剤で治療を行います。

鎮痛剤などで痛みが治まると活発に動き回り、再度悪化してしまう可能性があるため注意が必要です。

◆ 絶対安静

排泄以外ではほとんど動けないような状態まで安静が必要になる場合があります。

少なくともジャンプや飛び降りには避けるべきです。縦向きに抱っこすることもやめましょう。

床で滑ってしまうことも悪化要因となりますので対策が必要です。